

1. これまで色彩嗜好に関する調査は、集団の全体的傾向をあつかった報告が多く、個人の嗜好を追及したデータは少ない。

そこで、このパーソナリティを知ることにより、色彩嗜好を選択する基礎的な手がかりをえることを目的とした。

2. 対象は東京家政学院 中学・高校生 (13~18歳) 272名であり、方法は日本色彩研究所作成の150色を用いて質問紙法によりパネル調査 (1965~1968年までの間 1名につき4回) をおこなった。色彩の観察は JIS Z 8723 に従った。

3. 色彩分布の相関は、同一対象の場合 I のグループ (13~14歳) では0.97, II のグループ (14~15歳) 0.98, III のグループ (16~17歳) 0.96 となり、3つのグループとも年齢が接近するほど相関度が高い。

同一年齢の場合 II と III のグループ間の相関度が高い。パーソナリティは年齢が増加するに伴って同じ色彩圏に定着する。しかも、その色彩の内容は低い年齢ほどブルー圏、レッド圏に定着するが、年齢が増加するに従ってレッド圏の定着率が少なくなり、ホワイト圏、ブラック圏に定着するものが多くなる。